2016年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00～16：00　60分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。

3．解答は，ＨＢの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（50点）

一九九七年一二月一六日午後七時前、日本全国各地で、突然子どもたちがテレビの前でバタバタと倒れた。テレビ東京系で人気のアニメ番組「ポケット・モンスター」略して〝ポケモン〟放映中、七〇〇人以上の子どもたちが、痙攣を起こしたり呼吸困難に陥ったり、あるいは意識を失って病院に担ぎ込まれ、入院にいたらずとも何らかの被害を被った人数は一万人を超えるという前代未聞(1)のこの事件は、〝ポケモン・パニック〟として世界中で報道されることになった。

病院で手当てに当たった医師や精神科医の調査によって、原因は〝光過敏性てんかん〟と呼ばれる症状で、すべての子どもが番組の後半、派手な光の点滅を見ていて意識を失ったり気分が悪くなっていたことが判明した。番組の画像に光過敏性の発作を誘発するのに最適の条件がそろっており、テレビが原因であることが確実となったのである。だが一部の精神科医が指摘するように、原因は分かったものの映像情報と健康との関係は医学上でもほとんど空白状態にあり、あらためて研究を広げなければならない必要性が訴えられている。

「光過敏性てんかん」はイッカ性(2)ではあるものの、特に脳の発達が完了していない一〇歳から一五歳の子どもに起きやすいと言われている。小児の五％から一〇％が光に対する発作の素因を抱えているのではないかという指摘もあり、したがって痙攣を起こした子どもたちだけが特殊というわけではないのだ。またこの事件では、子どもだけではなく若い女性がヒステリー性の症状を起こしていたことにも注目する必要がある。

したがって現在問題になっている映像と［(3)］の関係は、それぞれの映像の内容を見ているだけでは、問題の本質を見逃してしまうおそれがある。同様にアニメを見たりゲームをしている子どもたちだけを対象にしていても、問題の所在は見えてこないはずである。

強い刺激が一時的な強硬症を引き起こすことは古くから知られていたが、それが組織的に研究されるようになったのは、一九世紀の後半のことである。これに関しては、パリにあるサルペトリエール病院が詳細な記録を残しており、特に映像と

(3) の関係を考える際の重要な資料となっている。

一九世紀末、パリの大病院は爆発的に成長する都市の「病」を囲い込む巨大な収容施設として機能していたが、サルペトリエール病院は特に四〇〇〇人もの女性患者を抱え、これらの患者を対象にさまざまな生理学的研究を行っていた。この当時の精神病院というのは、パリの警視庁と深く結びついて一種の準監獄となり、病院は警視庁を通して送られてくる〝反社会的分子〟をキョウセイ(4)するための、あるいはそうした犯罪を未然に防ぐための機関ともなっていた。サルペトリエールはそうした研究の基礎として、写真を中心にしたいくつもの装置を開発したが、その中心人物が一九世紀精神医学の基礎を築いたジャン＝マルタン・シャルコだった。

このシャルコの指導のもとに、サルペトリエール病院には特別に写真部門が設(5)けられ、ポール・レニャールやアルベール・ロンドといった当時最高の技術者が集められていた。特にロンドは、クロノフォトグラフィーを開発した生理学者マレの研究所で科学的写真を研究し、その成果を投入してサルペトリエール病院の写真部を一種の病理映像研究センターにしたのである。

その成果は、ロンドらが編纂（へんさん）した病理写真集『サルペトリエール写真図像集』に見ることができる。そこには光や音の刺激によって一時的なてんかんをつくり出したり、催眠術を使って患者を自由にコントロールするといった〝実験(6)〟が記録されているのである。〝反社会的分子〟である女性たちは、生体実験を提供する模範的な患者であることを求められ、シャルコらはそうした研究材料となった女性たちを自在に使って、ヒステリーと呼ばれる病気を研究していたのだ。

わたしたちにとって特に興味深いのは、強い光や大音響を使って人工的につくり出される硬直状態である。そこでは火花や回転する鏡といった、異なる種類の光を用いた刺激実験が行われていたが、対象は必ずしもひとりの患者ではなく、時には患者の集団を一度に強硬症に陥らせるような実験も行われていた。

このような奇妙な実験は、当時行われていた生理学や犯罪学の研究と密接に結びついている。前者の研究のなかでは、特にデュシエンヌ・ド・ブローニュによる顔面の電気刺激実験が知られている。電気刺激によって自由に表情をつくり出せることを発見したド・ブローニュらは、写真家ナダールの弟であるエイドリアン・トゥールナションの協力のもとに、顔面表情筋の動き

を撮影することに成功した。

望遠鏡や顕微鏡の延長にある光学技術としての写真を「見えないものを見えるようにする技術」として認識しながら、シャルコはサルペトリエールにおいて、それまで見えなかった「ヒステリーという病」を、患者の具体的症状を印画紙に定着することで、「見える」病にした。ヒステリーは可視化されてはじめて、病として保証されたことになる。シャルコは写真の明証性としての機能を知りぬいていたのだが、さらには見ることと見られることの関係が、支配することと支配されることの関係であることを十分に心得ていた。その権力関係の〝実演〟が、有名な催眠実験である。催眠術がこともあろうに当時の精神医学の大舞台に登場するようになったのは、シャルコの実演があったからだった。催眠術によって、ヒステリーというのは、好きなときにつくり出せる、操作可能な病気となった。

催眠術の基本は(7)ヒケン者の視線をとらえることだが、その際に何か光るものを見せることが大切である。懐中時計や指先の指輪など、視線をひとつの対象に集中させて、操作することが催眠術の始まりである。こうした催眠実験は、他の医師やインターンたち、さらには当時の教養人たちを(8)チョウシュウして行われた。そのためには周到な準備が必要であり、患者たちもまた訓練される必要があった。

シャルコらによる催眠術の実験と写真の撮影は、前者が言語、後者がレンズを使って行われたというだけで、(9)本質的には同じ「スペクタクル」なのである。つまり催眠術も写真も、サルペトリエールでは「眼差しの(10)政治」として行われていた。それは、単なる治療でもなければ今日のような意味での医学上の実験とも違う、いかに人間をコントロールすることができるかという、一種の「群衆の科学」の基礎実験だったわけである。この実験は、実は社会全体に関わるものだった。四〇〇〇人の女性患者は、社会から隔離され排除された存在というよりは、むしろ(11)選ばれた者だったのである。ヒステリー患者は催眠に罹(かか)りやすい。彼女たちの催眠実験の結果を最終的に利用したのは、激情しやすく、しかも暗示に罹りやすいという患者たちの性格が、そのまま群衆の性格そのものであることに気づいていた権力者たちである。一九三〇年代に登場する独裁者たちにとっての基本的な材料は、すでにこの時点で得られていたと考えてよい。

そしてわたしたちはここに、〝ポケモン・パニック〟の始まりのひとつを見ることができるだろう。それは見つめられることによって、徹底的に受動的になる身体の誕生である。写真を中心にしたさまざまな光学装置は、すべて身体の受動化に寄与している。わたしたちの身体は錯覚を通して、顔面の表情筋を電気刺激する電極に接続されるように、光学装置に接続される。これは一種の生体解剖であり、見る主体の徹底的な解体であり、要するに総体的な経験の終わりである。もはや身体は光学装置の仕組みに、よりよく反応するための機械でしかない。テレビの前で泡を吹きながら倒れていった全国の子どもたちやヒステリーを起こした女性たちは、サルペトリエールの患者たちの遠い末裔なのだ。

（港千尋『映像論』による）

注　クロノフォトグラフィー……連続撮影写真。

〔問一〕傍線(2)(4)(7)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕傍線(1)(5)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕空欄(3)に入れるのにもっとも適当な語句を左の中から選び、符号で答えなさい。

A　身体
B　医学
C　小児
D　精神
E　発作

〔問四〕 傍線(6)「〝実験〟」とあるが、「実験」の語に二重引用符（〝　〟）が付されているのはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　人体実験を遂行したシャルコら研究者たちの残虐さを弾劾するため。
B　現代科学の立場から一九世紀の科学的水準の低さを批判するため。
C　女性患者のみを対象にした実験に潜む性差別的偏向を示唆するため。
D　通常の意味での治療行為や医学的実験との違いに注意を促すため。
E　実験を発案したシャルコら研究者たちの知的独創性を強調するため。

〔問五〕 傍線(9)「本質的には同じ「スペクタクル」なのである」とあるが、なぜ「同じ」といえるのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　実験の公開を目的として患者の病状を可視化するという点では「同じ」だから。
B　実験する側が患者を一方的に支配し、恣意的に操作する点では「同じ」だから。
C　プライバシーを配慮せず、患者を実験に利用するという点では「同じ」だから。
D　精神病患者の症状を見世物として衆人環視に晒（さら）すという点では「同じ」だから。
E　てんかん性の硬直状態を刺激によって人工的に再現する点では「同じ」だから。

〔問六〕 傍線(10)「政治」を言い換えた四字の語句を本文中から抜き出しなさい。（句読点、かっこも一字と数える）

〔問七〕 傍線(11)「選ばれた者」とあるが、「選ばれた」とはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 倫理的問題を孕(はら)む実験に参加した患者たちは、医学の発展にとって不可欠な存在であったということ。

B 一般に男性に比べて受動的な傾向の強い女性は、実験材料として利用するのが容易であったということ。

C 患者のなかでも、実験の医学的意義を十分に理解した者のみが実験対象に選抜されていたということ。

D 医師の指導下で訓練を積んだヒステリー患者は、生体実験に協力する模範的な患者であったということ。

E 群衆との性格上の相同性ゆえに、ヒステリー患者は群衆の科学の基礎実験に好適であったということ。

〔問八〕 次の文ア～オのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア シャルコら研究者たちが女性のヒステリー患者を対象にして行った組織的な人体実験の結果、強い刺激が人間に一時的な強硬症を引き起こすことが発見された。

イ 〝ポケモン・パニック〟によって、光に対する発作の先天的素因といったことばかりでなく、より広範な観点から映像と健康の関係を研究する必要が明らかになった。

ウ 病気の具体的症状を可視化し、それを詳細に記録することを可能にした写真という光学技術は、医学の領域における治療と研究に飛躍的な発展をもたらした。

エ 一心不乱に対象を凝視する者は、実際には見る主体としての能動性を奪われており、受動化された身体は、もはや個々の刺激に自動的に反応する機械に等しい。

オ サルペトリエール病院で実施された諸々の実験は、一定の条件下における人間の身体の受動化という現象について考えるための興味深い資料を提供するものである。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

文学史の上に照すに、上世には主観的美を発揮したる文学多く、後世に下るに従ひ、一時代は一時代より客観的美に入ること深きを見る。（…）結果たる感情を直叙せずして、原因たる客観の事物をのみ描写し、観る者をして感情を動かさしむること、恰も実際の客観が人を動かすが如くならしむ。是れ後世の文学が面目を新にしたる所以なり。

（『俳人蕪村』）

和歌や俳句の時代的な様式の変化について、この正岡子規の観察はおおむね妥当といえるだろう。だが問題なのは、ことばによる「客観の事物」の「描写」が人の心を動かすやり方と、現実そのものがそうするのとを、子規がごく無造作に同一視している点である。写真のように「リアル」な媒体でさえ、われわれがそこに写された情景を見る目と、なまの現実を見る目には大きな開きがある。まして、「描写」のすべてを言葉の意味作用に頼り、読み手の想像力に依存する他ない文学作品の場合には、その違いがはるかに大きいのは断るまでもないだろう。写生による句作りの心得を問われて、子規はこう答えている。

写生に往きたらばそこらにある事物、大小遠近尽く詠み込むの覚悟なかるべからず。大きな景色に対して二句や三句位をやうやうひねくり出すやうにては迚も埒あかぬなり。（…）足もとに萌ゆる草、咲く花を一つ一つに詠まば十句や二十句は立処に出来るわけなり。蒲公英あらば蒲公英を詠め、嫁菜あらば嫁菜を詠め。

（『随問随答』）

むろん子規には子規なりの時代認識があり、江戸末期から明治初期にかけての和歌や俳句の現状に対する批判、そして革新への戦略があった。また「理想」と「写実」、主観と客観の問題についてさえ、彼は必ずしも偏狭なリアリズム一本に固執してい

たわけではない。だが、その点をどう割り引いてみても、写生をめぐる彼のこうした発言には、[1]文学一般、ことに詩にみられることばの働きについて、大きな誤解を招く要素があることを認めないわけにはいかない。

その要素とは、外界の事物を素直に「ありのまま」に「詠み込む」という考え方、つまり外界の事物は、ただそれらを名指すだけで簡単に詩のなかに取り込めるという見方である。ものにはそれぞれ決まった名前があり、詩人はそのいくつかを呼び出すことで、ただちに詩のなかに現実の一部を再現することができる、そしてその光景がおのずと「観る者」の心を動かすというわけである。だが、マラルメの皮肉にもあるとおり、「本当の、樹の密生する森は、紙にのせることができない」。「たんぽぽ」と言いさえすれば、それでたちまち紙上に黄色い花が現われるわけではない。それでもそこに、確かにたんぽぽの花が咲いているとわれわれに信じさせるものは、もっぱら詩人の腕、言いかえればそうした効果を挙げるようにことばを選び、そして組み合わせる能力に他ならない。

ところで写実主義といえば、誰もがすぐにフロベールやゾラやモーパッサン、あるいはゴーゴリやドストエフスキーといった、十九世紀のリアリズム作家の作品を思い浮かべる。だが実は、早くからロマン・ヤコブソンが指摘しているように、写実主義はいつの時代にもあった。「古典派も感情主義者も一部にはロマン派や、十九世紀の〈リアリスト〉たちでさえも、またかなりその気味のあるデカダン派や、さらには未来主義、表現主義等々の連中も、みな執拗に、現実への忠実さ、最大限の本当らしさ、つまりはリアリズムこそが、彼らの美的綱領の根本原理だと、繰り返し主張してきた」(「芸術におけるリアリズムについて」)。むろん日本の場合も同様で、西鶴や芭蕉を引き合いに出すまでもなく、すでに『古事記』や『万葉集』の初めから、程度の差こそあれ、写実主義の傾向が絶えたことはない。したがって、ある特定の文化と時代に属する特殊な一流派の特徴に、リアリズムの極致や模範を求める必要はどこにもない。

ヤコブソンによれば、十九世紀ロシアのリアリズム作家にみられる技法のひとつに、「非本質的な特徴によって行なわれる特色づけ」がある。つまり、[2]話の筋の上からはどうでもよい細部にこだわることで、リアルな感じを出すというやり方である。例えばアンナ・カレーニナの自殺を描こうとして、トルストイは彼女のハンドバッグにばかり注目する。またドストエフスキーや

ゴーゴリなどの小説では、主人公が初めに出会って話を交わす通行人が、あとから見て筋立てとは何の関係もなかったということがよくある。もっと以前の小説では、主人公が誰かに出会ったら、それはいつでも筋書きに無くてはならない人物だった。また自殺があれば、自殺そのものをまっすぐに描くのが当たり前だった。それなのに今、ハンドバッグの描写や無意味な通行人の登場が、かえってリアルな効果を生むのは、そうした手法がそれまでの語りの定石、惰性となった古い描写の規範を破るものだからである。

どんなに「ぴったりした」、真に迫った表現でも、何度も使い古されて慣れっこになってしまえば、誰の注意も引かなくなる。表現が、その指し示す対象と狎(な)れ合ってしまうからである。そうなると、描写のことばはただの符丁となって、瞬時に対象と結びつくために、その表現自体が読者の目に入らないばかりでなく、描かれた対象さえ、よく見えなくなる。そうして存在感の薄くなった対象をもう一度、はっきり目に見えるようにするためには、従来の慣習やきまりを破って、描写の表現そのものをわざとゆがめ、「変形」させることで、あらためて読み手の注意を引く他はない。ことに「猥(わい)せつ語の歴史」にはっきり見られることだが、持ってまわった婉曲(えんきょく)なことばでは実感が湧かなくなると、そのものずばりの表現が用いられる。だがそれにも慣れてしまうと、だんだん真実味が薄れるので、またぞろ「隠喩や暗示やアレゴリー」に訴えざるを得ない、といった具合である。その段階では、遠回しな表現の方が「挑発的」で、ずっと刺激が強いのである。

というわけで、どの時代、どんな文脈にも当てはまるような、リアリズム固有の描写の技法もなければ、表現の定式もない。子規の言うように、いつでも「ありのままの事物をありのままに」ずばりと言い切るからリアルなのでもないし、またその逆に、直接の名指しを避けて比喩的、迂(う)言的だから、いつでも本当らしく響くのでもない。結局のところ、読者の目に対象をまざまざと浮かび上がらせてくれるのは、[(3)]なのであって、具体的にどんな語がそれに当たるかは、時と場合による。絵や写真の場合もそうだが、ことに言語表現による描写について、それがなまの現実に対してどれだけ忠実か、といった「客観性」の尺度から写実をうんぬんすること自体が、そもそも無理なのである。

（川本皓嗣『日本詩歌の伝統』による）

注　マラルメ……一九世紀のフランスの詩人（一八四二～九八）。
ロマン・ヤコブソン……ロシア生まれのアメリカの言語学者（一八九六～一九八二）。
アンナ・カレーニナ……トルストイ（一八二八～一九一〇）の小説『アンナ・カレーニナ』の主人公。
アレゴリー……寓意。ある意味を別の物事にたくして表すこと。

〔問一〕　傍線(1)「文学一般、ことに詩にみられることばの働き」とあるが、その内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　事物を客観的に描写していくことで、読者の心を動かして感動を現出させること。
B　外界をありのままに言葉に写し取っていくことで、現実の一部を再現すること。
C　実際には存在しないものでも、実在するものだと錯覚させる働きをすること。
D　言葉の構成を組み替えることで、最大限の本当らしさを作っていくこと。
E　たえず新しい言葉を作っていくことで、現実を客観的に表現すること。

〔問二〕 傍線(2)「話の筋の上からはどうでもよい細部にこだわることで、リアルな感じを出す」とあるが、なぜリアルな感じが生じるのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 登場人物と近い関係にある人や物事を書きこむことで、それぞれの人物の内面を読者により強く印象づけることになるから。

B ストーリー展開に沿った必然的な筋立てをあえて破壊することで、現実の人生と同じような日常的偶然性を筋立てに与えることができるから。

C 話を展開させつつも登場人物の細部にこだわることで、人物間の相関関係が浮かび上がり、作品全体の有機性がより緊密なものになるから。

D 現実生活と同じような日常のささいな事を小説世界の中に描き込むことで、はじめて作品世界の客観性が担保されることになるから。

E 本筋とは関係のない瑣末(さまつ)な描写を挿入することで、旧来のストーリー展開の仕方に慣れた読者の注意を引きつけることができるから。

〔問三〕 空欄(3)に入れるのにもっとも適当な文を左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「ありのままの現実と、比喩的に表現された現実、その二つを統合した語」、つまり、存在感をなまなましく伝える「創造的な語」

B 「読者の意表をつく奇抜な語、とりわけ使い古された表現を刷新した独創的な語」、つまり、従来の慣習を破壊した「真にせまった語」

C 「対象の実在性を回復するための語、特に直接の名指しと比喩を的確に使い分けた語」、つまり、作家の技量が問われる「戦略的な語」

D 「われわれに耳新しい語、少なくともその文脈のなかでは聞き慣れない語」、つまり、斬新な工夫をこらした「思いがけない語」

E 「主観的な作家の思いを吐露しつつも、外界の客観性を保てる語」、つまり、伝統的でありつつ革新的でもある「新造語」

〔問四〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 対象を直接に表現することが読者にとってありふれたものになると、婉曲表現が現実をそれらしく再構築するようになる。

イ 正岡子規は、外界の事物を言葉で指すことにより、客観的表現を新たに作り出すことができると考えていた。

ウ 古今東西、さまざまな文学的思潮が存在したが、いずれも客観的に現実を再現することをその根幹に据えてきた。

エ 正岡子規は、写生の句の上達のためには、目についたものをことごとく詠み込むようにしなければならないと考えていた。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

昔のやうの宮ばらの御有様、あまた承る中に、大斎院こそ、めでたくおはしましけむとおぼえさせたまへ。

ただいまの時、(1)后にておはしまさむ御方々は、華やかに今めかしくも、また心にくくもおはしまさむ、ことわりなり。これは、いつもめづらしからぬ常盤の蔭にて、有栖川の音よりほかは(2)人目まれなる御住まひにて、いつもたゆみなくおはしましけむほどこそ、限りなくめでたくおぼえさせたまへ。

さりながら、御歳なども若くおはしまさむほどは、ことわりなりや。むげに老い衰へ御世も末になりて、(3)そのかみ参りなれて侍りけむ人もをさをさなく、今の世の人もはかばかしく参ることもなき末の世になりてしも、九月十日宵の月明かりけるに、雲林院の不断の念仏の果てに参りたりける殿上人、四、五人ばかり、帰さに本院の御門の細めに開きたるより、(4)やをら入りて、昔より心にくく言はれさせたまふ院のうち、忍びて見むと思ひけるに、人の音もせずしめじめとありけるに、御前の前栽心にまかせて高く生ひ茂るを、露は月の光に照らされてきらめきわたり、虫の声々かしかましきまで聞こえ、遣水の音のどやかにて、船岡の颪、風冷ややかに吹きわたりけるに、御前の簾少しはたらきて、薫物の香いとかうばしく匂ひ出でたりけるだに、今まで御格子も参らで月など御覧じけるにやと、浅ましくめでたくおぼえけるに、奥深く、箏の琴を平調に調べられたる声、ほのかに聞こえたりける、(5)さはかかることこそと、めづらかにおぼえける、ことわりなり。

さて、かかる御有様を見けると、知らせ奉らざらむ口惜しさ、とて、人などの参る方へ立ちまはりたまへりける、そこにも女房二、三人ばかり物語して、もとより侍りけるに、いとをかしくて、琴など弾き遊びて、明け方になりてこそ内裏へ帰り参りて、めでたかりつることども語りたまひけれ。

時の所などは、明け暮れ人多く、殿ばら、宮々も、常に立ちまじりたまへれば、たゆみなから(6)むも［(7)］や。

（『無名草子』による）

注　大斎院……村上天皇第十皇女、選子内親王。五代の天皇にわたり、五十七年間賀茂斎院を務めた。　常盤の蔭……常緑樹に囲まれた斎院御所のこと。　船岡の颪……御所近くにある小高い船岡山から吹き下ろす風。

〔問一〕傍線(1)「后にておはしまさむ御方々は、華やかに今めかしくも、また心にくくもおはしまさむ、ことわりなり。」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　后になろうとなさる方々には、華やかな流行を追うことも、また対抗心をお持ちになることも求められるのは道理だ。

B　后になろうとなさる方々は、華々しく時めいたとしても、一方で気を利かせて控えめでいらっしゃるべきだ。

C　后でいらっしゃるような方々の中には、華々しく時めいていても、一方で孤独を感じる方がいらっしゃるのは本当だ。

D　后になろうとなさる方々の中には、華やかにうわべは着飾っていても、また腹黒い方もいらっしゃるものだ。

E　后でいらっしゃるような方々は、華やかに現代風であっても、また奥ゆかしくてもいらっしゃるのは当然だ。

〔問二〕 傍線(2)(3)(4)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(2) 「人目まれなる御住まひにて、いつもたゆみなくおはしましけむ」

A 人もめったに訪れない御住まいなのに、いつも気を抜かずに過ごしていらっしゃった

B 人のほとんどいない御住まいだったので、いつも見回りを怠りなくなさっていた

C 人もめったに訪れない御住まいなのに、いつも宴の準備がしておありだった

D 人のほとんどいない御住まいだったので、いつも警戒心をあらわになさっていた

(3) 「そのかみ参りなれて侍りけむ人もをさをさなく」

A 若かったころ、よく訪れていた人々もすっかり飽きてしまい

B その御所に、参上してよく宴を催していた人々もみな亡くなり

C 当時、よく参上しお仕えしていた人々もほとんどおらず

D そこを行きつけの場所とし、盛りたてていた人々も離れていき

(4) 「やをら」

A 急に

B やっとのことで

C 示し合わせて

D そっと

〔問三〕 傍線(5)「さはかかることこそと」という殿上人の感想を具体的に述べたものとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A さてはかくも不用心なことをなさっていたのかと
B それではこんな風雅なことをなさっていたのだと
C なるほど気にかかることをなさっていたものだと
D それはわざと凝ったことをなさっていたからだと
E さてすぐに一緒に演奏にとりかかりたいものだと

〔問四〕 傍線(6)「らむ」と同じ用い方をしている「らむ」を左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A むげに男のまじらざらむこそ、人わろけれ
B 南殿の桜は盛りになりぬらむかし
C とどまらむをだに、強ひてそそのかし出だしてむ
D その馬、よしなからむ人に請ひ取られなむとす
E かねて用意したらむには、それにまさること何事かなからむ

〔問五〕 空欄 (7) に入るもっともふさわしい語句を、文中から十字以内で抜き出しなさい。

〔問六〕 次の文ア～カのうち、本文の内容に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　大斎院は、若い折には美しい内親王としてほめたたえられていた。

イ　大斎院はひどく老い衰えてしまった晩年になっても、若い時と変わらない派手な生活を好んだ。

ウ　大斎院の御所に忍び入った殿上人たちは、その庭がひどく荒れ果てているのに驚いた。

エ　殿上人があきれたのは、御所の門はおろか御格子も不用心にも閉まっていなかったことだった。

オ　殿上人たちは、忍び入って様子を垣間見（かいまみ）てしまったことを大斎院の女房たちに知らせることにした。

カ　この逸話の主旨は、大斎院の心ばえのすばらしさである。